

第9回 CFOフォーラム・ジャパン2009 講演録



猛練習では越えられない壁がある

スポーツ選手には、必ずスランプが訪れる。私にはこれまで三度のスランプがあった。

最初のスランプは、二三歳のときだった。初めてマスターズに参加したときの話である。私は子供のころから、厳格な父からスパルタ教育を受けてきた。そのおかげでトッププロになったと言われている。二三歳での日本プロ優勝が評価されて、マスターズの招待が決まったときも、シーズンオフの三か月間一日二〇〇〇発の猛特訓の日々を過ごした。しかし、一九七八年、最初のマスターズ本番、オーガスタの練習場で参加選手たちの打球を見たとき、「ダメだ、よい成績は残せない」と私は思った。精度が全く違うのだ。彼らは、二〇〇ヤード離れた畳一畳分のスペースに回転しつくされたボールを落とす。当時の私には、とてもできる芸当ではなかった。

ところが、私は父の指令に従って、「優勝宣言」をしてしまう。絶対にダメだと思う自分の現実と、六八で回って優勝宣言だ、という父の指令とのギャップに、私は心底苦しんだ。

初日は八〇を打った。二日目、予選落ちは確実だが、なんとか普段の力を出して六〇台で回れば、父の怒りもおさまる日本プロマスコミに対しても体面が保てるのではないかと私はそう考えた。12番ホールが終わって二オーバーだった。13番か15番のロングホールでイーグルをとれば六九の望みがある。私は左ドックレッグのギリギリを狙って打った。しかし、余裕のないときは必ずミスをする。打球は、枝に当たってクリークに落ちた。ドロップして三打目を打った。四打目はピンが手前ギリギリである。「なんとか寄せてパーをとれば、まだ六〇台のチャンスがある」。頭の中はそのことはいっぱいだった。私はギリギリを狙って打った。惜しかった。あと二ヤード前にいけばピタリだった。が、少し弱く、またしても手前のクリークに落ちた。それでも、まだ「ボギーでいけば六〇台は可能だ」と思った。見れば、打てそうなところにボールがある。二三歳の私は、池の中に入っていた。ギャラリーからは大きな拍手がわき上がる。それまでの努力をすべて込めて、私は打った。瞬間、球がスローモーションでスウィットと上がっていった。前には飛ばず、また戻ってきた。競技委員の人が何か言っているが、頭の中は真っ白だった。戻ってきた球は、私の足にボンと当たった。「身体に当たったらペナルティだから気をつけて」と、彼は言っていたのだ。この瞬間、六〇台の夢は散った。この13番ホールで、私は三打った。

「猛練習では越えられない壁がある」——そのとき私は思った。理論を元にした練習をしなれば意味がない。それが、一回目のスランプの答えだった。練習は必要だが、その先にまだ何かがある。帰国した私は、妻とこれから生まれてくる子供とともに独立した家庭を築こうと、家を出た。その後手本にしたのがマスターズで見た、ジャック・ニコラウスだった。彼のビデオテープを教科書に、バックスイングするときのズボンのしわ一つの動きまで、二年間かけて擦り切れるほど見た。

マスターズで感じたことは形となった。二八歳からの五年間で四度の賞金王がとれたのは、そうした研究のおかげだった。

ところが、私は父の指令に従って、「優勝宣言」をしてしまう。絶対にダメだと思う自分の現実と、六八で回って優勝宣言だ、という父の指令とのギャップに、私は心底苦しんだ。

スランプを宝にかえて

——プロ選手として歩んだゴルフ人生のスランプと海外試合

「猛練習では越えられない壁がある」——そのとき私は思った。理論を元にした練習をしなれば意味がない。それが、一回目のスランプの答えだった。練習は必要だが、その先にまだ何かがある。帰国した私は、妻とこれから生まれてくる子供とともに独立した家庭を築こうと、家を出た。その後手本にしたのがマスターズで見た、ジャック・ニコラウスだった。彼のビデオテープを教科書に、バックスイングするときのズボンのしわ一つの動きまで、二年間かけて擦り切れるほど見た。

マスターズで感じたことは形となった。二八歳からの五年間で四度の賞金王がとれたのは、そうした研究のおかげだった。

ところが、私は父の指令に従って、「優勝宣言」をしてしまう。絶対にダメだと思う自分の現実と、六八で回って優勝宣言だ、という父の指令とのギャップに、私は心底苦しんだ。



変化に最初に気付くのは自分自身

次のスランプは、技術革新という変化とともにやってきた。賞金王を最後にとった八六年の翌年、メタルウッドが登場した。打感が変化し、球離れが早く、泣かされた。何とかしなければならぬが、自分には策がない。うまく打っているジャンボ尾崎をどれほど観察しても、自分に可能かどうか

●プロフィール(なかじま つねゆき氏)
小学校時代からゴルフをはじめ、10代で「全日本パブリックアマチュアゴルフ選手権」(72年)、「日本アマチュアゴルフ選手権」(73年)で優勝し、75年にプロ転向。青木功氏、尾崎将司氏とともに男子ツアーを牽引して黄金期を支えたほか、世界4大メジャーですべてベスト10入りしている日本人唯一のプレーヤー。これまでにレギュラーツアー 48勝、その他11勝、シニアツアー 4勝と、優勝回数は63勝を記録している。現在もレギュラー、シニア両ツアーで活躍中。主な戦績：日本プロ優勝 1977年、1983年、1984年／日本シリーズ優勝 1982年、1993年／日本プロマッチプレー優勝 1983年、1986年、1992年／日本オープン優勝 1985年、1986年、1990年、1991年／日本シニアオープン優勝 2005年、2006年、2008年／日本シニア優勝 2006年 なお賞金ランキング1位は4回にわたって獲得。また、アマチュアを含め日本と名前がつくすべてのトーナメントを制覇し八冠に輝く。

からない。そこで、私はスイングを変えて練習してみた。「なぜ尾崎のまねをするのか」マスターズで日本人初のアンダーを出したとき、世界でトップクラスのきれいなスイングをしていたのに、なぜ変えるのか——周囲は言った。しかし、人間は必ず変化する。身体も変化するれば、周囲も変化する。すべては変化し、とどまってはられない。その変化に誰よりも先に気付くのは、自分自身である。周囲は「いいスイングをしていたのに」と言うけれども、いいスイングができないから変えるのだ。

世間の声にはおかまいなしに、私はコーチについて徹底的にインパクトゾーンを修正した。その答えは、二年数カ月後に現れた。メタルを克服して、九〇年、九二年の日本オープン連覇へとつながった。周囲の声に惑わされることなく、「自分にしかわからない」と思わなければ、この二回目のスランプを越えることはできなかった。

多くの人に支えられて

三回目のスランプは少しきつかった。三九歳のとき母が亡くなり、その三年後父が亡くなった。亡くなる三カ月前、弟がやってきて私に告げた。「親父は兄貴には教えるなと言うけど、末期の肝臓がんで三カ月の命だ」。

二三歳で家を出たとき、「今までは親と兄弟のために生きてきた。これからは家族のために生きる」という置手紙だけを私は残してきた。話をしてわかるような父親ではなかった。その父

が余命三カ月と聞いた瞬間、素直に会いに行こうとは思わなかった。私は父が好きではなかった。三カ月たったころ尊敬する杉原プロに、「バカもん、早く行ってこい」と喝され、家族を車に乗せて父の元に向かった。インターチェンジに乗ろうとしたとき、「親父が死んだ」と弟から電話が入った。父の亡骸と対面したとき、出たのは謝罪のことばだけだった。「親父悪かった。勘弁してくれ」。父にとつては自慢の息子のはずである。日本で賞金王を取り、海外でも活躍し、プロゴルファーとして成功して、父は自分のゴルフ場をつくることもできた。それなのに、私はすがりついて泣きながら、ただただ父に謝るだけだった。

そこから心のスランプに陥った。励みがなく、よい成績を出しても嬉しくない。さみしいばかりで、成績もどんどん下がっていった。気が付けば周りは若い選手ばかりになっていた。あの頃は、力いっぱい打てるのは当たり前だった。そのころの素晴らしさがわかったのは、五〇歳を過ぎてからだった。努力こそがすべてだと思つてやってきたが、猛練習すれば翌日は身体が痛くなる。自分のやってきたことは間違いだっただか。そんな思いが頭の中を回っていた。

そんな私を変えたのは、トーナメントへ向かう車の中で聞いていた米沢興護教会の田中信生牧師のメッセージテープだった。「あなたは悪くない。すべては最善のためにある」というような内容だったと思う。理解者がいると思つた。それは、心の安定をもたらした。「自分は自分でいいんだ」。

中嶋常幸氏

プロゴルファー

努力を携えて、その先に向かつていけばいいんだ」と実感した私は、七年ぶりに優勝できた。

我が家のトロフィーケースには、必ず空間があけてある。そこにトロフィーが入ることはもうないだろうと私はあきらめていた。しかし、妻だけは七年ぶりの優勝を心底信じていた。その姿を見たとき、自分は家族に支えられ、友人に支えられ、さまざまなものに支えられてきたことを知った。自分一人の力ではなく、多くの人の力によって三度目のスランプを越え、感謝の気持ちを知ることができた。

のちに聞いた話だが、父は律子(妻の名前)が常幸の嫁でよかったと母にいつも言っていたようだ。私は三度目のスランプを乗り越えて父の愛情にもたどり着くことができた。

三度目のスランプは、こうして私のかげがえのない宝となった。

※本稿は、二〇〇九年二月一〇日開催の「第九回CFOフォーラムジャパン2009」の講演内容を編集部にてまとめたものです。

